
桜の下で

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の下で

【コード】

N3370Z

【作者名】

柚葉

【あらすじ】

父の都合で私立小学校の転校生となった翠。幽霊のごとくふらついていたとき、桜花という少女と知り合う。しかし、桜花には秘密があつて!?

*この小説は、私が別サイトで「ふーちゃん」のペンネームで書いていたものです。決して盗作ではありませんm()m

桜の下で？

私は転校生だ。

突然父に言われて転校することになった私・杉原翠は、私立の小学校に入学。

そこで初めて知ったのが『寂しさ』だった。

「知った顔がない…。」

元から教室で一人孤立していた私は、特に悲しいと思わない。

しかし、知った顔がないのは心細かった。

と、そんなことを考えつつ幽霊のように校庭を歩いてた私は顔を上げる。

「…。」

何か、声が聞こえた。

軽やかで、穏やかな声。

「…ねえ。名前は？」

まただ。

さつきよりはつきりと聞こえる。

「…誰？」

やっと私は気付き、そう聞いた。

「こつち。もつと右だつてば。」

いたずらっぽい声にとまどいつつ、言われたとおり右を見る。

そこにあつたのは、桜の木。

花びらが土の上に落ちていくのがとてもきれいだった。

「見える？」

「え？」

見える？って何が？

ていうか、誰が言ってるの？

「私、見える？」

その時、桜の木の根元に人を見つけた。

私と同年代ぐらいの少女。

「見える？って…かくれんぼ？」

自分で言っただけだなぁと思う。

もう六年生なのに、そんなことする人はあまりいないだろうし。

「そうね…。みんな見つけてくれないの。」

「いや、かくれんぼって冗談なんだけど。」

「分かってる。」

少女は微笑んだ。

それに合わせて私の顔もほころんだ。

「ね。名前は？」

少女は再度繰り返した。

「杉原…翠。」

何故か自分の名前を考えてしまう。

「翠、ね。いい名前。」

私は思うまま、少女の元へ走り出す。

もっと近くで話してみたかった。

「私は桜花。よろしく、翠。」

よろしくと言っても、手をさしのべることはなかった。

普通は握手とかするものなのに。

「うん。よろしく…。」

私がそう言った時、桜花がふと顔を上げる。

「もう帰った方がいいよ、翠。もうすぐチャイム鳴るだろうから。」

「じゃあ、桜花も…。」

「…行つて。」

桜花が私の背を押した。

私は校庭の真ん中に出る。

不思議に思っただけ振り向いたら、桜花の声が聞こえた。

「翠…また、ここで会いましょう。」

「桜花…？」

チャイムが鳴って校庭のみんなが砂煙を上げながら帰っていく。
仕方なく私も帰ろうと走り出した。
目の端に桜の花びらが見えた。

桜の下で？

教室での勉強というのは、なんて退屈なんだろうか。ちよつど窓側の席に決まった私は、本気でそう思った。桜花のことが気になって仕方がない。

「…じゃあ、この問題を杉原。」
当てられた私は我に返る。

「分かりません。」
即答した。

知らないのにごまかすなんて、見た目からして悪い。なら正直に答える方がマシだという考えからだ。まあ、こういう性格だから孤立していたんだらうけど。

「…そうか。じゃあ。」
特に何も言わずに私は席に着いた。
周りの人が驚いた顔でこつちを見ている。

「私、そんなに変？」
こつという時は無表情で話すのが一番。
条件反射でみんな前を向くのだ。

「桜花…。」
なんとなく気になって、ため息のように私は言った。
窓の外には校庭があり、その校庭にたった一本の桜。
桜花は今、何をしているだろうか。
自分でも不思議なほど、それだけが気になっていた。

* * *

どうやらこの学校では、一人飯も可能のようだ。
昼休みを知らせるチャイムが鳴ると、みんな弁当を持ってどこかへと散らばっていった。

そんな中、数人が寄ってくる。

「杉原さん。お昼御飯一緒に食べませんか？」

「と、言われますと…?」

「この学校では、校舎内のどこでお弁当を食べてもいいんです。

というわけで、食べませんか？」

ものすごいキラ目で私を見る。

ていうか、この人誰？

それに、桜花のところに行きたい。

「…ごめんなさい。私、行きたいところがあるから。」

「そう？なら、また今度。」

あっさりと引き下がり、その人達は楽しそうにしゃべりながら行ってしまった。

私はそれを見送った後、校庭に向かった。

あの、桜の木の根元に向かって。

「…翠？」

桜花は私の気配を感じ取り、驚いたように顔を上げた。

「どしたの？」

「弁当…。ここで食べようと思って。」

「…そっか。」

私は敷物を敷いて桜の下に座った。

「桜花は？弁当、食べないの？」

「えへ。早弁しちゃった。」

「早弁って…。」

私は絶句した。

おとなしそうな印象が桜花にあったから、そんなことしなないと思っていた。

「え、だつておなか空いたりしない？」

桜花は小首をかしげる。

私は微妙な表情だ。

「そう、かなあ…。」

「翠はならない？」

「うん。あんまり感じないけど…。」
と、その時。

グギユル〜という不思議な音が聞こえた。

「やっぱり、おなか空くわ…。」

桜花が顔を赤らめながらひっそりと呟いた。

しかし私の耳はそれを聞き取っている。

私は大笑いした。

校庭に結構響く。

おまけに涙まで出てきた。

「そ、そんなに笑わなくてもっ。」

「ごめんごめん。だって、さあ…。」

桜花が真っ赤になるのに、私は平謝り。

「何よお…。」

「あ、ちよつと桜花！」

いつの間にやら、桜花の口に卵焼きが入っていた。

「一番最後に残しておいたのに…。」

「笑ったのとこれでおあいこ。」

桜花は嬉しそうに笑った。

私もそれと一緒に笑う。

帰り道、誰かとこんな風に笑いあうのは初めてだ、と思った。

桜の下で？

それから毎日、私は桜花と会っていた。

同じクラスでもないから、昼休みなどが楽しみだった。

毎日楽しそうに桜の下へ行っているから、クラスの人是不思議に思っていたようだけど。

「さあて、今日も行くか！」

四時間目終了のチャイムで大きく伸びをする。

あの桜の木にも小さな若葉が見えてきたある日のことだ。

「ねえ。毎日、どこに行ってるの？」

クラスの人の一人が話しかけてきた。

確か名前は風上千春。

「千春さん。…それは、教えたくないです。」

クラスの中で一番気が強く、常にリーダーシップを取りたがる人。何回か話したことがあるけれど、気が合わないと言うことがすぐに分かった。

「へえ。そんなにいいところなの？」

「教えたくないって言うてるじゃないですか。」

恐れられている千春に口答えしたのが珍しいのか、だんだん人が集まってくる。

先生達はどこかに行ってしまったから、この会話はヒートアップするばかりだ。

「ま、いいけど。尾行すればいい話よねえ。」

うつすらと笑いながら教室を出て行く。

人だかりが困った顔をして散っていった。

「なんなのよ、まったく…。」

言いながら窓の外の桜を見る。

「ごめん、桜花…。今日は行けない…。」

昼飯も、喉を通らなかつた。

* * *

「…というわけで。」

数日後の桜の下。

私は来れなかったいきさつを話した。

「なんか嫌ね、そういうの。しかも尾行なんて。」

桜花が淡々と言う。

こついうところ、私とかなり気が合うのだ。

というより、気が合わない方がおかしい。

今の場合。

「なんで千春さんはあんな性格なんだろ。イラつくよなあ。」

今は放課後で、千春もいない。

悪口は言いたい放題だった。

「自分がされたらイヤじゃないのかな？」

「そういう風な場面がないんでしょ？もしくは言われなかったためにワ

ガママ姫様やってんの。」

「なるほど」

たまっていたストレスが消えていく。

そういつた意味でもここはいいところだった。

「翠、そろそろ帰った方がいいんじゃない？」

桜花が遠慮がちに言う。

気付いて空を見ると、オレンジ色の夕焼けになっていた。

「うん。じゃあ、また明日ね。」

「明日は来れる？」

桜花が少し寂しそうに聞いた。

「あー…うん。たぶん来れる…はず。」

かなり微妙な返事だと自分でも思うが、人生何が起きるか分からない。
い。

仕方ないと考えるしかないのだ。

「じゃあ、来れたら来てね。待ってるから。」
桜花の言葉に、私は深く頷いた。

次の日に、何が起こるか考えずに。

桜の下で？

噂とは、実にすばらしいものだ。
悪い意味で、だけど。

「ねえ、幽霊と話してるってホント？」

朝のことだ。

クラスメイトの一人が意味不明な問いかけをしてきた。

「はあ？」

「本当なの？」

何がどう転んでそうなるのか。

「だって、風上さんが言ってたよ。杉原さんが幽霊と話してるって。」

「

「風上？風上千春…？」

心の中に怒りの感情が出る。

何故かは知らないけど、桜花を幽霊だと言われたのがとてつもなく嫌だった。

「許せない…！」

私は思うままにかけたした。

千春に聞くために。

桜花は幽霊じゃないって真っ正面から言ってる。

それ以上、私達の桜を汚さないで！

「千春！」

もう呼び捨て。

当たり前だ。

「あら、杉原さん。」

千春は、校庭で、一本の桜の木を背景にして笑った。

あの、私達の桜の木の前で。

「幽霊　桜花、だっけ？いるの？」

「うるさい。あんたに話すことなんか一つもないから。どっか行ってよ！」

ここに来られるのが嫌だった。

別に複雑なことをなくせば、ただ単純に嫌だった。

「どこにも行かないわ。私は気になったことは最後まで調べるタイプなの。」

「先生方にとっては大喜びね。私にとっては嫌なだけなんだけど？」

「あんたの気持ちなんかどうでもいいの。」

私と千春はにらみ合う。

周りには何事かと見に来ている人が大勢いた。

「…翠？」

後ろから知っている声がかかった。

私はおそろおそろ振り向いた。

「…桜花…！」

間が悪すぎる。

今では、千春やその他がいるのに。

「…？そこに、いるのね？」

千春が今までとは違う声で言った。

自信がない、という声。

「見えるでしょ？目、悪いの？」

私は皮肉を込めて言っただけだった。

でも千春は、怒るところか不思議そうな顔をするばかり。

「違う…。あなたが言ってる場所に桜花さんがいないわ…。」

「ちゃんというよ？」

ある思いが私の頭に浮かぶ。

もしかして、本当に桜花は…。

そんなわけない！

「ふん！どうせ桜花さんは幽霊なんですよ！なら見えるわけないわ。」

「

千春の言葉に、静まってきていた怒りがよみがえった。

「何言ってるの！？桜花は幽霊なんかじゃないわ！現に私に見えてるじゃ。」

「翠。」

私が最後まで言う前に桜花が私を止めた。

振り向くと、桜花の顔が悲しげにゆがんでいる。

「桜花…？」

桜花は目を閉じる。

すると、目が痛くなるほどの光が桜花からあふれた。

「これなら、見えるでしょう？千春さん。」

光が消えた後の桜花の顔は、これまで見たことがないほど冷たかった。

思わず息を飲む。

「ごめん、翠…。」

「何で謝るの？」

私は混乱していた。

桜花が幽霊と言われ、桜花が意味不明なことを言う。

人生メチャクチャだ。

「私、人じゃないから…。」

「人じゃ、ない？」

「ええ。千春さんの言ったとおり。私は…。」

「言ったとおり…って…。嘘でしょ！？嘘って言うてよ！桜花は…人、だよね？」

怖かった。

こんな感情は初めてだ。

どうして？

「ごめん、翠…。本っ当に、ごめん！」

「謝るだけじゃ、分かんないよ…。」

聞かない方がいいのに、聞きたくなる。

真実を確かめたい！

「千春さん。どっか行つて。」

桜花が冷たく命じた。

千春はしばらくポカーンとしていたが、慌てたように去っていった。周りの人もついていく。

「桜花？」

「座つて。ちよつと、話そう。」

桜花は微笑んだ。

よかつた、いつもの笑顔だ。

「ごめんね、翠。私の本当のこと言わなきゃいけなかったのに。ずっと言わないできたから……。」

悲しげに目を伏せる。

桜花にこんな顔をさせることになった千春に再び怒りが。

桜花には、そんな顔をしてほしくない！

「わたし、ここに住みついてるの。」

桜の下で？

事は四年前。

桜花が六年生だった頃だ。

「ねえ、桜花さん。宿題やってきてくれる？」

クラスでは桜花に向けたいじめがはやっていた。

宿題を代わりにやらせる、桜花から借りた本をぼろぼろにして返すなど、ひどいものだ。

運悪くクラス替えで同じクラスになったから、三年の頃から続いている。

「…うん。」

うまく断る方法が思いつかず、言う通りにしてしまっ。

そこが悪いところだ。

そんな時、目についたのが桜だった。

「いちようの中に、一本だけ…？」

桜花は共通点を二つ見つけて、嬉しくなった。

名前と、たった一人という寂しさ。

「ね。私達、同じだね…。」

言っただとたん、涙があふれた。

辛くて、寂しくて、楽になりたいと思っ。

そして次の日。

桜花は自殺した。

* * *

「うそ…。」

私は驚いて、かすれた声しか出なかった。

「で、友達がいないことが心残りだったの。だからここに帰っ。

「 たんだ。」

「 思い出しているのか、目を細めて言う。」

「 じゃ、桜花は本当に幽霊なの!? 」

「 問題はそこだ。」

「 そうね。だいぶ忘れてたけど…。」

「 最初と同じように、穏やかな声で言った。」

「 忘れてた…って…。」

「 でも私、もう行かなきゃいけないな。」

「 桜花は、簡単に、のんびりという。」

「 行く? どこに? ……うそ、でしょ…? 」

「 予想がついた私は息がしづらくなった。」

「 桜花がいなくなるなんて…。」

「 ちょっと、そんな悲しそうな顔しないでよ! 大丈夫だって、また

「 会えるよ。だって私達は。」

「 桜花が言った時、強い風が吹く。」

「 聞こえない…。」

「 何て言ってるの? 」

「 でしょ? 」

「 分かんなかった…。」

「 きっと、大切な言葉だったのに。」

「 あ、もう時間だあ…。」

「 桜花の体が透けていく。」

「 本当の幽霊のようにふわりと浮かんで。」

「 桜花! 」

「 伸ばした手が空を切る。」

「 穏やかな笑みを浮かべながら…。」

「 桜花は消えた。」

「 桜花がいたところに残っているのは、桜の若葉と茶色の幹。」

「 桜花…! うそでしょ! ? 戻ってきてよ! 」

「 校庭に一人、私は叫ぶ。」

「ねえ…！」

涙があふれた。

「翠…」

私の名を呼ぶ、きれいな声。

まだあの声が耳に残っているのに。

「友達がいないことが心残り」

そう桜花は言っていた。

じゃあ、私のせい！？

「桜花は…友達だったんだ…。」

友達。

春の間、一緒に遊んだ友達。

「桜花…！」

友達のための涙が茶色の土に染みこんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370z/>

桜の下で

2011年12月14日20時51分発行